

荒川 洋治 評 (現代詩作家)

「可能性の文学」への道 織田作之助評論選

織田作之助著 (本の泉社・1100円)

戦後最初の流行作家、織田作之助(一九一三—一九四七)は、大阪の庶民を描く「夫婦善哉」「世相」などの名作で一世を風靡したが、文学論も展開した。本書は戦前・戦後の評論の主要作を編年体で収録。斎藤理生編。書名は編者による。代表作「可能性の文学」(一九四六)は、三三歳で亡くなる一か月前、総合雑誌『改造』に発表された。いま読んで、心を弾ませる魅力的な論考だ。

大阪の棋士、坂田三吉。無学で棋譜も読めないが「天衣無縫の棋風」で人気を得た。坂田に「銀が泣いている」という名文句がある。

「悪手として妙な所へ打たれた銀」といふ駒銀が、進むに進めず、引くに引かれず、「坂田の心になつて泣いている」のだ。女房は三

心を弾ませる明快な文学論

吉に、「あんまり阿呆な将棋さしなはんや」と言い残して死ぬ。「よっしゃ、判った」。でも三吉は一世一代の対局で「第一手に、九三の端の歩を九四へ突いた」。この定跡破りの「阿呆な将棋」がたたって木村、花田両八段に惨敗。だが織田作之助はいふ。 「六十八歳の坂田が実験した端

の歩突きは、善悪はべつとして、将棋の可能性の追究としては、最も飛躍していた。前代未聞の「阿呆な将棋」にこそ、人間の、そして、文学の豊かな可能性があると切り切る。「日本の文学の考え方は可能性よりも、まず限界の中の深さ」を尊ぶ地点で止まったとし、志賀直哉の信奉者批判へ。「サルトルと秋聲」では、敗戦で世の中は変わったのに文学は何も変わっていないとし、日本を滅ぼしたのが「日本人のものの考え方」だとしたら「明治以後の文豪たちにも、責任がある」と。 愛読する井原西鶴について。「西鶴の妙味は、眼はリアリストであり、手はリアリストでないという虚々実々の兼合の面白さにある」

(「西鶴の眼と手」)。また「二流音楽論」では一流への「ノスタルジア」ではなく、太宰治や坂口安吾の「二流に徹した新しさ」への期待を語り、島崎藤村の「にせ一流ぶり」と永井荷風の「二流ぶり」に目をとめる。「一流ぶり」と二流ぶりの混乱した「高見順への理解も面白い。「頭で考えた自己はない。形のある作品が自己である」(「雷の記」)。

あれ、これが文芸評論なの、といふかる向きもあるだろうが、織田作之助の批評は率直で明快。文芸批評の用語にたよらず、行けるところまで自分のことばで進む。そこがすがすがしい。将棋の話、文楽の話が、いつのまにか文学の話になって、白熱。こちらも話の輪に入りたくなるような、親しみと興奮をおぼえる。論理が少しもつれるときも、ここに書かれたことを読むことがいいことなのだと感じるのだ。文芸評論というものはない。あるとしたら、人間に思ふ。大切なことだ。 織田作之助は、戦時中も時流に合わせることなく市井の情愛を描いた。「木の都」「雀」で日本の小説に新境地を開いた。こうした最上の作品が生まれたのは、内部に批評のことは備えていたからだろう。作品と批評が「可能性の文学」を切り開いたのだ。現代は、小説を書く人たちのほはずべてが自作と身辺の興味に没入し、批評を書くことに消極的だ。小説は小説とだけつながっているのだ。その点でも織田作之助の姿は大きな残像となる。全二四編。